

色のない島へ

八木橋 利昭 連企画研究事務所

脳神経科医の著者と全色盲の視覚心理学者とが南の島を訪ねる話しである。その島というのは先天性全色盲の人が集団で暮らす場所だ。学問的な興味で行くわけだが、段々に、その島の人たちが豊かなくらしをしているのに気がつく。

島の空港で子供たちが出迎えたときに、眩しそうに目をしょぼしょぼさせているのを見て、同行の心理学者はすぐに同じ仲間だと直感する。子供たちも同時にそれを理解する。黙って荷物を持つ子供たち。言葉は通じなくても、強い親しみを感じあう。

昼間はゆっくりと動いているが（錐体がないため中心窩で見ることができず、周辺の桿体で物を見るため眼球が常に振動している。そのため視力も弱い。）、それが夕方から暗順応が始まるととたんに元気になり、夜釣りでは、とても見えないところでもどんと魚を釣りあげる。色相の差はわからないが、その代り、明暗の差には強い。つや、材質に対する感覚もわれわれとはおよびもつかないくらい発達しているようだ。百鼠どころか、千鼠の世界にいるのかもしれない。

熟したバナナを見分けるのに、黄色とうす緑色の区別がつかないが、「私たちは色だけで判断しない。目で見て、触って、匂いを嗅いで、全感覚を使っているのです。あなたたちは色でしか判断しませんけど」といわれるところがおもしろい。白と黒と灰色の視覚世界に生きているが、美しい自然の中で心豊かな生活を営んでいるようすがよくわかる。

星の王子さまが「本当のことは目には見えないんだよ」といっていたことを、数十年ぶりに思い出した。色は何のためにあるのか、また考えてしまう。訳も無い。オリヴァー・サックス著、大庭紀雄監訳、

春日井晶子訳、早川書房刊、本体 2,000 円。

香りと色

たちばな みち エール・ド・クルール

最近お腹をひどくすかせた子供のように欲している色がある。朱色でもワイン系でもない本当の真っ赤。今まで一度だって赤という色に好んで近寄ったことはなかったのだが。

気になる色というのは一体何なのだろうか。少々興味深く思えることがあったので書いてみようと思う。

幼いころから香りにはとても魅かれていて、調香師などという職につきたいとすら願ったこともあった。それ故、中学の頃から秘かにいろいろな香りを楽しみ、恋をする頃になると、贈られる、という形でつけるようになった香りも、恋の数だけ（そして別れの数だけ）徐々に増えてくる。私にとっては、心のどこかに残っている光景や、相手のしぐさや言葉などは、香りと共に存在していた。

ところが、ある日恋をした男性は、「香水やそういった香りの類いは好きではない。」とのたまった。つまり、彼からのメッセージとなる新しい香りが存在しないだけではなく何にせよ、私自身の周囲からもできる限りの香りをはぎ取る努力が必要とされたのだ。

月日は流れ、関係は変わらなかったが、ある日突然、どうしても香りを感じたくなかった。それは発作といってもよいような強い欲求であった。いかにも香水らしき代物から軽やかなものまで次々に味わった。その自分だけの香りを聞く儀式を終え、再び無香料状態へと戻った。香りを断って限界がきたのと同じよううなうなりで、私は「赤」という色を求め始めていた。

そんな折りに、香りと色というテーマでセミナーをすることになり香りの海にどっぷりとつかることになった。「香水は永遠の記憶、という言葉や、パロマ・ピカソの「強烈な赤が香りと共に更に記憶に深く刻まれる」という詩の一節を読んでいると、ふと思う。私にとっての色というものは、香りと共に歩む2本の足なのだ、と。五感がその人の中で各々どのように絡みあっているか、個人差はあるだろうが、私にとって興味深い出来事であった。